

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2020
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ふしぎ」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1. 『内なる町から来た話』 ショーン・タン著 岸本佐知子訳 河出書房新社 2020

◆言葉のまったくない絵本『アライバル』で世界的に有名になったショーン・タンの新作。現実を踏み外しておかしい不思議な話と、その絵で構成された大判の1冊。海のない街のビルの屋上で空の魚を釣りあげた少年の話とその絵が素晴らしい。

2. 『ブラック・トムのバラード』 ヴィクター・ラヴァル著 藤井光訳 東宣出版 2019

◆「クトゥルー神話」で有名な恐怖小説作家、H・P・ラヴクラフトの短編「レッド・フックの恐怖」を大胆に書き換えた中編小説。宇宙的な力を持つ〈眠れる王〉をめぐる物語で、ハードボイルド風のミステリが後半いきなり暴力的な幻想小説に展開していくところが素晴らしい。黒人差別主義者ラヴクラフトの差別的な作品を、彼の作品を愛する黒人作家が鮮やかにひっくり返してみせた。

3. 『ハンガー・ゲーム 0 少女は鳥のように歌い、ヘビとともに戦う』上下
スーザン・コリンズ著 中村佐千江訳 角川文庫 2020

◆いまさらなんの解説も説明も不要の超ベストセラー「ハンガー・ゲーム」シリーズの最新刊。これは第10回ハンガー・ゲームの年、つまり『ハンガー・ゲーム ①～③』の時代から64年前が舞台になっている。コリオレーナス、なんと18歳！

4. 『楽園の鳥』 阿部智里著 文藝春秋 2020

◆いまさらなんの解説も説明も不要の超ベストセラー、阿部智里の「八咫鳥」シリーズの新作……というか、新シリーズの1巻目。それも、あの大战から20年後が舞台。前シリーズとはひと味違う仕立てになっている。新シリーズから読むのもよし。

5. 『パールグレイの瞑想』 岡田衣代著 書肆侃々房 2020

◆歌のひとつひとつが、現実を不思議な空間に連れてくる。
・^{くはく}のせんたくもある。いまはただくじらとなってただよいあそぶ
・天翔るキングギドラを待ちながら今朝も地球をギギギッと廻す
・わたくしを捉えたいならもも色の耳という耳そよがせて来い



- いま生まれたような白さで駆けて来い遠き眼をした冬の麒麟よ
- 暗闇で砂の呪文を吐いている浅蜷はいつかの私のようななかでも、次の1歌が素晴らしい。
- 雲ながる窓辺の椅子に背の割れた少年の日の抜け殻がある「セミ」を「少年の日」に置き換えるだけで、世界がひっくり返る。

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）



6. 『日本幽霊画紀行』 堤邦彦著 三弥井書店 2020

◆京都を拠点に、国文学の沃野から、近世における〈幽霊〉の探求を黙々と続けている著者には、これまでも多くの著作があるが、本書はその最新の精華。著者が実地に、日本各地の寺院を探訪し、そこに秘蔵されている幽霊画の逸品を見聞、その軸にまつわる由来を拝聴する……という、一見、国文学者らしからぬナマの探訪の記録と記憶が、随処に活かされた好著である。

7. 『消えた心臓／マグヌス伯爵』 M・R・ジェイムズ著 南條竹則訳 光文社古典新訳文庫 2020

◆日本とならぶ〈おばけすき〉大国であるイギリス——ハロウィンの時期になると、炉辺に集う人々が、それぞれにファミリー・レジェンドを語り合うという良き伝統を、醇乎たる怪談文芸の形で蘇らせたのが、M・R・ジェイムズの怪談小説だった。ケンブリッジ大学の碩学として、古文書学に大きな貢献を成した著者にとって、生徒を前に披露する炉辺の怪談は、恰好の娯楽であり最上の余技であった。怪談翻訳の名匠・南條竹則が精魂こめた新訳によって、英国怪談の妙味に浸っていただきたい。

8. 『泉鏡花セレクション』全4巻 澁澤龍彦編 国書刊行会 2019-2020

◆その晩年、澁澤龍彦は、愛読する泉鏡花の選集刊行計画に参画、みずから偏愛する作品のリストを遺していた。計画は遺憾ながら頓挫するが、遺されたリストは、編集者たちの熱意で甦り、国書刊行会から〈泉鏡花セレクション〉全四巻として刊行されることになった。案内役を務めたのは、新泉鏡花賞作家・山尾悠子である。小村雪岱による戦前の鏡花本の意匠を見事に復活せしめた、装丁家・柳川貴代の妙技にも、要注目だ。



リストの8タイトルは、
田原市図書館で
貸出・予約可能な資料です。
2020.12作成